

「(歴史を)よく知る必要がなぜあるのですか」

—危うい日本人の歴史認識—

橋本 健 午

(ノンフィクション作家、
日本エディタースクール講師)

第1章 2001年7月、アンケート調査を行う

「日本人は、自分の国の歴史をよく知らないといわれますが、学校での授業と関係があると思いますか」との問いに、「よく知る必要がなぜあるのですか？」と20歳の女性は答えた。中学・高校ではどのように歴史（日本史）を教えてきたのか、若い人たちの回答をみると、日本の歴史教育は“歴史教科書”以前に問題のあることが改めて分かった。

アンケート調査はたまたま、ある中学生用歴史教科書について、史実の歪曲、近隣諸国への配慮が足りないなどと、国内ばかりか中国や韓国から、日本政府への修正要求などの“抗議”が盛んだった時期と重なり、その問題にふれる意見もいくつか見られたが、本稿はそれについて直接論じるものではない。

私は2001年7月、日本エディタースクールの学生を対象に「中学・高校での『日本史』に関する授業は、どのような状況だったか」の調査を行い、18歳から33歳の76名から回答を得た。男性が42人、女性は34人、平均年齢は23.0歳である。高校卒業年とその所在地、また設置者（国公立）別をみると、卒業年は1988（昭和63）年から2001年（平成13）まで、また高校の所在地は神奈川・東京・千葉・埼玉など首都圏を中心に26都道府県に及び、設置者別では公立出身が54人と7割を超え、私立は20人、国立高専が1人、無記入1人となっている。

「歴史」（日本史）についての設問は、好き嫌い、授業の形態、どの時代まで習ったかなどを、中学・高校時代別に聞き、最後に「歴史を知らないといわれる」とことと「学校の授業」の関係のほか、自由に意見を記入してもらった。サンプル数は76と少ないものの、社会科（日本史・歴史）専門の学校ではないので、現代日本の若者の実

態（歴史認識）と見て差し支えないだろう。

◆若者たちは日本史とどう接したか

中学時代および高校時代の「日本史」との関わりを、次のように聞いてみた。

問1：「歴史」（日本史）が好きでしたか、嫌いでしたか

問2：先生は、どのように教えましたか。a) 教科書どおり b) 教科書を使わず
c) 教科書以上のエピソードも教えてくれた d) その他

問3：授業では古代から現代へと時代を下りますが、現代（つまり教科書全部）まで習いましたか

問4：もし、途中で終わった場合、どの時代あたりで終わりましたか

・明治時代 ・大正時代 ・終戦ごろ ・1970年（大阪万博）ごろ ・昭和のすべて
・1990年の始めごろ

問5：“途中で終わった”理由の説明がありましたか

問6：＜あったと答えた人に＞その理由は、どのようなものでしたか

a) 時間が不足 b) 思想上の観点から c) 先生の都合で d) その他

問7：日本人は、自分の国の歴史をよく知らないなどといわれますが、学校での授業と関係があると思いますか。あるいは？ その他、自由にお答えください

まず、中学時代の状況をみると、日本史好きは42人（55.3%）、嫌いは30人（39.5%）、どちらでもないは3人（3.9%）であった。教え方は教科書どおりが45人（59.2%）、教科書以上のエピソードも教えてくれた27.5人（36.2%）、教科書を使わずは2.5人（3.3%）、その他1人であった。“0.5人”は複数の教え方があったことを示す。

古代から現代まで、教科書全部を習った人は30人（39.5%）、途中までだったのは46人（60.5%）と4対6の割合である。後者の46人に、どの時代あたりで終わったかを聞くと、「明治」7人（15.2%）、「大正」0人、「終戦ごろ」24人（52.2%）、「大阪万博（1970年）」5人（10.9%）、「昭和のすべて」3人（6.5%）、「1990年代始め」1人（2.2%）、無記入5人（10.9%）、その他1人となっている。

途中で終わった説明が、「あった」の18人（39.1%）に対し、「なかった」は23人（50.5%）、無記入5人である。その理由を受けた18人のうち17人（94.4%）は「時間が不足」だったという。残りの1人は無記入。

中学時代を総括すると、日本史の好きな人のほうが多く、授業は「教科書どおり」が約6割と主流で、「エピソード」を交えた授業も3分の1強あった。しかし、教科書を最後まで習った人は約4割でしかなく、習わなかった人の多くは「終戦ごろまで」で7割近くもあり、その理由のほとんどが「時間不足」であった。

公立中学では、少子化でクラス数が少ない現在、社会科（すべてを教える）の先生

はひとりということが多い。ふつう地理→歴史→公民の順に習うが、先生によってそれぞれ得意分野があり、その分野に多くの時間が費やされて、最後の公民にしわ寄せが来たり、あるいは日本史（とくに現代史）が疎かになったりする。都市によっても進め方は違うという。

昨年夏、都内の公立中学3年生に聞くと、1年で地理を学び、2年では世界史と日本史の授業が終わらず、3年で残りをやっている。公民はほとんど習っていない。また、学校や教師によって教える科目が違うようだし、いま通っている塾では学校でやらないところをやっていると、1学期末現在の状況を説明してくれた。

◆教え方次第で、好き嫌いが変わる

同じように高校時代の状況を見ると、日本史好きと嫌いともに32人（42.1%）おり、どちらでもない4人（5.3%）、無記入は8人（10.5%）である。日本史を選択しなかった者を除く59人に、教え方を聞くと、教科書どおりが26.5人（44.9%）、教科書以上のエピソードもが25人（42.4%）、教科書を使わずは5.5人（10.8%）、その他2人（3.4%）であった。

古代から現代まで、全部習った人は14人（23.7%）、途中までだったのは44人（74.4%）、無記入1人である。後者の44人に、どの時代あたりで終わったかを聞くと、「明治」7人（15.9%）、「大正」5人（11.4%）、「終戦ごろ」14人（31.8%）、「大阪万博（1970年）」と、「昭和のすべて」はともに5人（11.4%）、「1990年代始め」2人（4.7%）、無記入5人（11.4%）、その他1人となっている。

途中で終わった説明が、「あった」のは19人（43.2%）、「なかった」は20人（45.5%）、無記入5人である。理由を受けた19人のうち「時間不足」が14人（73.7%）、「思想上の観点から」「先生の都合で」各1人、その他・無記入は3人であった。

高校時代の場合、「好き嫌い」は人数的には五分五分であるが、非選択（15人）グループでは中学時代に嫌いだったのは9人、好きだったのは4人（どちらでもない・無記入は各1人）と嫌いが多く、それが受講しない主な理由になっており、中退の2人も嫌いに近い。

授業は「教科書どおり」と「エピソード」がそれぞれ4割を超えているものの、現実には教科書を最後まで習わなかったのは4人に3人もおり、「終戦ごろ」で終わったのは約6割と多い。その理由の説明も半数近くはなく、あっても4分の3が「時間不足」で、あとは「思想上の観点から」と「先生の都合」であった。

高校の授業は選択制であるため、個人的な事情がからみ、さらに文系・理系による違いや学年別の選択などもあり、修得科目は複雑化する。ある都立高卒生（女26歳）は、1年で現代社会と地理、後半に倫理と政治・経済を少し学び、2年で世界史、3年で必修の日本史を学んだ。彼女の場合、一応は日本史を含め全科目を履修したことに

なるが、やはり日本史は途中までだったという。

教える側はどう対処しているのか。都立高校のあるベテラン教諭（日本史）は、「決められた時間内に現代まではとてもやれない。生徒が興味をもつようなエピソードを入れれば、さらに遅れる。また、文化祭や体育祭などの年間行事でつぶれることもあり、時間はますます不足する。年度始めに現代社会の先生と教える範囲の連携をする場合もあるが、最近の私はどこまでやれるかを見通して、夏期や冬期休暇に補習をする。それは教師としての使命、責任である」と語った。

多くの先生がこのように熱心であればよいのだが、現実はいま見てきたとおりである。戦後もすでに半世紀以上も過ぎていながら、今の若者は父祖の時代（とくに身近な戦後の歴史）さえも学ばないという状況が、今回の調査で裏づけられた。のちに見るように、不満の声が多く見られるのは当然であろう。

◆なぜ途中で終わっても問題にならないのか

高校で、非選択および中退を除いた59人のうち、日本史の授業を中学・高校とも教科書を全部習ったのは13人（22.0%）しかいない。中学では全部だが高校は途中までが11人（18.6%）、中学は途中だが高校はお終いまで習ったのは2人（3.4%）、どちらも途中で終わったケースがいちばん多く、33人（55.9%）となっている。

せっかくの授業（教科書）も最後まで習わなかった人が、全部習った人の3倍近くもいるのは何とも不幸なことで、「明治時代などで終わっているのに驚いた。みんな最後まで習っていると思いこんでいたから」とアンケート回答者（女21歳）もいう。

どの中学や高校でも教科書の途中で終わることが常態化しているにもかかわらず、とくに問題視されないのはなぜだろうか。「先生が途中、自分の好きな？ 時代を詳しくやるので、最後に時間が足りなくなるのが原因だと思う」（男24歳）のや、「時代をさかのぼりすぎたところから始めるため、現代がなぜこのような社会状態なのかというところまで届かない」（男28歳）などと授業の進め方や、試験のあり方をあげるものもいた。

それは“日本人の常識”となっているのだろうか。“自虐史観”論争がにぎやかとなった97年には、これまでの歴史教育の反省を率直に口にする研究者もいるとして、東京新聞に山田朗明治大学助教授（近現代史）の談話「歴史の授業で、近現代史は省略されるか、熱心さのあまり、先生が加害面ばかり生徒に押し付けてしまう傾向があったのでは」が紹介されている（97年6月27日「自虐か真実か 社会科教科書論争／アジアがにらむ 日本の“履歴書”／『従軍慰安婦』いぜん平行線／排外主義の恐れも」）。

今夏（2001年）、あるテレビ番組の某ニュースキャスターは歴史教科書問題に関連

して、「どうせ学校じゃ、そこまで習わないんだから」といった。この発言に、「学校では時間不足で、近・現代史は習わないか、習っても駆け足だから、教科書の内容なんてどうでもよい、ということなのだろう」と不快感を露わにする学生もいた（女19歳）。

また、大学で講義もする落語家の桂文珍は次のように慨嘆する。「日本史においては、現代史と古代史はさわらないほうが無難やそうで、高校の日本史の時間も、3学期に明治維新ぐらいまで進むと、『あとは試験に出ません』と先生がいうという。学校でも現代史はほとんどやりません。本当のことをいうと、国際化する日本の中で、ここがいちばん大事なところなんですよ。そこを教えないんですから、すごい国です」（『痛快！ 歴史人物―彼等は天使か、悪魔か―』PHP研究所2001、「織田信長」の項）。

日本史ではないが、受験との関係で、こういう驚くべき実態もある。99年、熊本市内のある県立高校では、地理歴史で必修の世界史を理数科の生徒に履修させずに卒業させていたことが発覚した。同高は、現行の指導要領では受験とかけ離れた必修科目が増え、生徒の負担が増しているのに、弾力的な運用をしたつもりだったと説明した。さらに、同県内の私立女子高でも理系コースの生徒に世界史などを履修させなかったことも発覚している（東京新聞99年6月13日「必修の世界史を履修させず卒業／熊本の県立高が3年間」）。これは特殊な例だろうか、それとも氷山の一角だろうか。

◆受験の道具でいいのか、自国の歴史

2000年9月、TBS「ここがヘンだよ日本人」で、東大の学生が平然と「歴史を覚える必要はない」と発言し、外国人から「歴史を知らなければ、再び過ちを繰り返す。戦争もまた」と反論されたというのが、外国人の考えのほうかはるかにまともである。

本来“教養”あるいは、生きるための“知恵”として学ぶべき歴史が、受験との関連で切り捨てられる現実、日本の将来に恐ろしい結果を招くことにならないか。

最近の高校および大学入試での社会科の出題範囲を見てみよう。国語・社会・数学・理科・英語の5教科で選抜する都立高校の、社会科の日本史関連をみると、99年「歴史…古代～近代」平城京のようす／書院造／安土城下町の繁栄した理由／19世紀の出来事についての4問、2000年は「歴史…古代～近・現代」古代の生活／各時代の代表的な文学作品／南蛮貿易／食生活の面から見た日本と世界の歴史、01年は「歴史…中世～近・現代」13世紀の日本の農村／戦国大名の領国／江戸幕府の政策／近・現代の繊維輸出額の推移の各4問となっている（市進出版「2002年入試用 東京・首都圏 高校受験ガイド」より）。

入試では最近、人々の生活の歴史的な流れを答えさせる設問が多いというのが、“戦

争責任”などはやはり敬遠されているようだ。また、私立では開成高校の5教科が唯一の例外で、ほとんどが国語・数学・英語の3教科か、英語中心の2教科だけの試験で、社会科はおろか日本史の出る幕はない。他道府県の私立でも同じことであろう。

これでは、試験にない科目、また出題されない時代（現代史）を習う・覚えるのはムダという発想が出てくるのも無理からぬところだ。また、私立高を志望する中学生にとっては、内申書は多少気になるものの、面倒な暗記物など敬遠したくなるだろうし、親もどうせ受験科目でないからと授業を軽視する傾向にあると、進学塾の関係者はいう。

現代史を教えない・習わないという状況は動かしがたい事実であり、それを容認する雰囲気も当然のごとくあるのはなぜか。入試に出ないからか、それとも教えないから入試に出ないようになったのか、まさか「思想上の観点から」ではないだろう。

いずれにしても、日本史は中学時代から敬遠されるため、“歴史知らず”“歴史嫌い”が多くなるのは必然の結果といえる。“始めに受験ありき”が長年続いてきたところに問題の一つがあるようだ。

次に、大学入試センター試験の地歴には、世界史A・B、日本史A・B、地理A・Bがある。2001年の日本史Bの設問は、衣料の歴史／原始・古代／中世の土地制度と戦乱について／近世から近代初頭までの文化・社会・政治／近代の政治・社会／日本経済と恐慌・戦争・好況の関係について、の6分野（全時代）となっている。

ここでも歴史的な流れを答えさせる設問だが、最近は「現代」も重視されてはいるものの、“戦争”は単語だけのようである。このようにセンター試験の日本史は、6分野から満遍なく出題されるので、受験で日本史を選択する生徒は、授業の進み具合に関わらず、すべての時代を学習しなければならない。ランクが中堅以上の高校では、授業は入試を意識してやっているはずと、先のベテラン教諭はいう。

2002年の国公立大学の入試要綱をみると、大学ごとに、また学部・学科ごとに入試科目は細かく分かれているが、一般的にはセンター試験の標準科目「国語、地歴または公民、数学、理科、外国語」の範囲内といえる。私立大学はもっと簡便であろう。

ところで、大学入試で受験生がもっとも多く選択する社会の科目は日本史、ついで世界史で、地理は少ないという。2001年のセンター試験の受験者数をみると、地歴の中心科目である「B」の、日本史は63,634人、世界史は43,754人、地理が42,370人となっている。地理は点がとりやすく、世界史は点がとりにくいが必修であり、日本史は細かい問題が多いにもかかわらず、である。

これは数年前から続く傾向で、問題集の多寡にも現われている。ある中規模の書店をのぞくと、高校社会関係の参考書の棚は2列12段あるが、日本史関係は6段と平台を合せ全体の半分以上を占めており、世界史は4段強、地理は4分の3、倫理は4分の

1、現代社会と政治・経済で1段という状況であった。

このような“現実”は、今回の調査状況と矛盾する傾向を示しているようだが、アンケート回答者の最終学歴は、高卒や短大・私大卒などさまざまで、センター試験の枠を取り外せば、やはり一般的な日本の若者の実態と見ても大きな誤りではないだろう。

◆戦後、高校の授業はどのように行われてきたか

今回の調査に協力した彼らは、学校でどのような選択をして、学んだか（あるいは、学ばなかったか）は、年齢によって多少の違いが出てくる。それは後に述べるように学習指導要領がたびたび改訂されたからである。

高校における現行（89年改訂、94年度実施）の社会科と、78年改訂の科目と必修・選択の異動をみると（カッコ内は、標準単位数）、78年からの社会科は現代社会（4）／日本史（4）／世界史（4）／地理（4）／倫理（2）／政治・経済（2）であるが、94年以降は地理歴史と公民に分けられ、地歴では世界史A（2）／世界史B（4）／日本史A（2）／日本史B（4）／地理A（2）／地理B（4）となり、公民では現代社会（4）／倫理（2）／政治・経済（2）と細分化された。履修必須の科目は、地歴では世界史Aか世界史Bのいずれかと、日本史A、日本史B、地理A、地理Bのうち一つ。公民では、現代社会または倫理＋政治・経済のどちらか、となっている。

78年版に比べると、世界史が重視されトップに踊り出て必修となったが（理由は、次に紹介するように極めて明白！）、日本史は履修してもしなくてもよいことになった。現代史は「公民」で学ぶということかもしれないが、自国の歴史を学ばないで済ませるという“思想”はどこから来るのだろうか。

当時の報道「新指導要領案／「国際化」の影に復古色／明日の教育 波高し／日の丸 掲揚せねば処分も／社会科の解体 『時代の要請』と言うが」（東京新聞89年2月11日）によれば、「高校では、『社会』が消え世界史が浮上した。現行の社会科を解体して『地理・歴史』と『公民』に組み替え、必修もいまの『現代社会』に代えて『世界史』にするという。社会科が消えることには関係者の間で抵抗があった。戦後民主教育のシンボルとされ、40年近くもなじんできた教科。（中略）社会科の解体に走ったのは歴史、とくに世界史の学習を重視する研究者たちだった。高校の世界史履修率が不振だったことも背景にある。ここでも『国際化』が顔を出す、中曽根前首相が文部省に注文をつけた事情から、政治の影も」とある。

一方、社会科を残してと運動してきた人たちは、「文部省は社会主義、社会党……と“社会”が好みではなかったんでしょ」と嘆く。同日の社説には「『一夜にして変わった』という高校社会科の解体」とか「国旗・国歌の掲揚、斉唱も強制的になった。度々、指摘してきたように、こだわりを持つ人はなお多く、宗教的に抵抗感を持

つ私立学校もある。慎重な運用を望む」とあるのだが。

別の記事では、小学3年で必修のそろばんは4年でも必修とされ、5、6年でも活用をとったため、竹下首相のお膝元、島根県仁多郡横田町（全国のそろばんの7割を生産）では、「これで2、3割は需要が増える。竹下さんのおかげ」と、そろばんをはじく。見出しには「要望、陳情400件にも」とある。

教育なんて、こんな次元の低いところで（政治家にとっては高度な政治的判断？）、簡単に変更されるものであったのか。

◆「日本史」は好きか嫌い

再びアンケートの回答を報告しよう。日本史を学ぶ側の、中学／高校時代の好き嫌い状況をみると（対象59人）、

（ア）「中学／高校とも好き」だった理由（29人、49.2％）

- *覚えがよかった／先生が面白かった（男18歳）
 - *（両時代とも）戦国の時代が好き（男20歳）
 - *文系だから／面白い先生がいた（女22歳）
 - *三国志を読んで歴史に興味を持った／戦国時代の武将に興味があるため（男22歳）
 - *有名な歴史的人物への興味・魅了されていたため／国の歴史、居住地域の風俗などの由来や宗教信仰への背景に興味（男23歳）
 - *（両時代とも）自分の国の歴史を知るのは楽しい（女23歳）
 - *考古学が好きだった／人間について知りたかった（男24歳）
 - *父が日本史の教授だから／成績がよかったから（女24歳）
 - *（両時代とも）子供のころからマンガ『日本の歴史』で慣れ親しんでいた（女25歳）
 - *戦国時代が好きだった／マニアックな授業だったから（男25歳）
 - *楽しいし、得意分野／興味が深まるころだった（男26歳）
 - *（両時代とも）本当にあった話だから（女26歳）
 - *（両時代とも）当時の人間模様が面白かった（女26歳）
 - *魅力ある人物がたくさんいたから／日本という国がどのようにして成り立ってきたのかを知ることができたため（男28歳）
- など。

このグループは、もともと“歴史好き”の人が多い。歴史上の人物や物語に興味をもったり、幼少より身近に歴史関係の本や話題などがある家庭環境の影響によるという傾向のほか、学校の先生（授業）が面白かったというのも見逃せない理由といえる。

反対に、（イ）「中学／高校とも嫌い」だった理由（16人、27.1％）

- *（両時代とも）昔の将軍が誰かなんて興味がない（男21歳）

- * (両時代とも) 難しい漢字が多い。世界史のほうに興味がある (男 22 歳)
 - * 暗記が苦手だった／漢字の暗記と先生が苦手だった (女 23 歳)
 - * (両時代とも) どうでもいいことだったから (男 23 歳)
 - * 自分に関係がないと思ったから／勉強する気がまったくなかった (男 23 歳)
 - * (両時代とも) 執筆者の歴史を見る視点が分からない、ただの記録のようで面白くなかった (男 24 歳)
 - * たくさん事柄を覚えなければいけないから／さほど関心がなかった (女 25 歳)
- などである。

このグループの、嫌いという理由は複雑である。暗記物だから、人名など難しい漢字が多い、面白くない・つまらない、先生が嫌いなどからは、先に見たように教科書どおりの授業では、覚えることばかりが多く、だれでもイヤになるであろう。したがって、「昔の将軍」に興味もなければ、「自分に無関係」と思うのも止むを得ないのか。

歴史といえば、東洋を含め世界史に傾くのは、壮大、かつロマンを駆り立てる英雄や物語に満ちているからであろう。しかし、問題は「自分に無関係」と思う根拠は何なのかということである。自国の歴史や、父祖の、いや自らのルーツを知らずして、はたして日本人足りうるか、という疑問は湧かないのだろうか。もう一つ気になるのは“漢字”というキーワード、これは日本人にとって無視できない“日本語”の問題でもある。

それはひとまず置いて、好き嫌いに変化のあった例をみよう。

(ウ) 中学では「好き」が／高校で「嫌い」の場合 (7 人、11.9 %)

- * 昔から歴史が好きだった／先生がつまらなかった。教え方が下手 (男 20 歳)
 - * ノートをいかにきれいにまとめるかが楽しかった／世界史のほうが好き (女 22 歳)
 - * 源義経など、ナゾが多くて面白いと思った／受験のための暗記ばかりで、細かな興味のないことばかり覚えなければならなかった (女 24 歳)
- など。

世界史と比べてということもあるが、その後の授業の進め方、教えてくれる先生の好悪感によって、好きだったものも嫌いな科目になってしまうことを示唆している。

反対に、(エ) 中学では「嫌い」が／高校で「好き」の場合 (3 人、5.1 %)

- * つまらなかった／先生が面白かった (女 20 歳)
 - * 暗記する項目が多いため／先生の授業の仕方が好きだった (男 22 歳)
 - * よく分からなかった／先生が分かりやすく教えてくれた (女 22 歳)
- となっている。

少数だが、やはり先生の教え方によって、嫌いだった科目も好きになる場合がある

というのは救いであろう。

◆“歴史知らず”と授業の因果関係

最後に「日本人は、自分の国の歴史をよく知らないなどといわれますが、学校での授業と関係があると思いますか」という、「自分の国の歴史をよく知らない」とことと「学校での授業」との関係、および自由な意見を求めた（76人のうち、無記入は2人のみ）。

授業との関係について答えた中で、①「ある」は5人、②「あると思う」が8人、③「大いにある」と、④「少しあると思う」はいずれも2人、⑤「ないとはいえない等」は3人（以上、20人）に対し、関係が⑥「ない」2人、⑦「ないと思う」7人、⑧「あまりない」1人、⑨「あると思わない等」1人の11人となっている。

それぞれの意見を聞こう。カッコ内は性別と、たとえば、○×とある場合、前が中学、あとが高校時代の、好き（○）、嫌い（×）、どちらでもない（△）、非選択（非）、無記入（…）を表わす。

①「ある」

*歴史を見る視点・論調とかがよく分からないから、執筆者の顔がよく見えないから、ただの記録のようで面白くない。教科書の比較をやるというような、歴史を説明する視点が、掘り下げて考える力を養うのに必要ではないか（男××）。

何を習って、何を教わらないのかがあいまい。教科書の前半だけ習うのが必修科目だった（男×○）

*教科書に記されたこと以外教えない傾向が強い。生徒はすべてを覚えられるわけではない。大学入試のシステムも、生徒が教科書以外のこと（エピソード）を望まない原因だと思う（男×非）

*日本史の授業は「ウソ」を教えている場合もあるからだ。とくに、太平洋戦争あたりの記述はかなりアヤしいものがある（男○○）

どんな授業にもいえるが、日本の教育、教師が、もっと興味を示すようなカリキュラムを組んだほうがよい。事柄が多すぎ、もっと人物について取り上げたほうがよい（男○○）

②「あると思う」

*もう大学に入るためだけの授業で、歴史を知るための授業ではない（男××）。

とくによく教えられたのが、戦国時代から江戸時代だったような気がする（男××）

*大昔のことなんてどうでもよいから、近現代史をもっと詳しく教えてほしかった（女××）

*ただでさえ、いろいろあったのだから（歴史）。もっと印象に残るような教え方をしてあげてほしい、金八先生みたいに（女××）

- *興味を持てるように教えてくれたり、楽しい部分を積極的に取り上げてくれたら、私に関しては少しは違っていただかもしれない。私を含めて、恐ろしいほど自分の国の歴史を知らない人が多いと思う反面、漠然とした必要性も感じます。しかし、自ら勉強する気にならないのも事実ですが（女××）
- *興味の問題なので、それ以上知りたかったら、自分で勉強すると思うし、学校ではそれなりのことは習ったと思う（女〇×）
- *戦争での出来事など、詳しく教えてもらっていない。戦争で負けたことをあまり気にせず、経済復興のために力を注いだのとの関係があるような気がする（男〇〇）
- *中学の授業で、みんなが興味を持てるように教える工夫が必要だと思う。たとえば、人物中心にエピソードを入れて話すなど（男〇〇）

③「大いにある」

- *年号や人物名を覚えるだけの暗記学科であるため、興味を持つ学生が極めて少ないと思う（男×非）
- *授業以外で歴史にふれる機会は、本人が志向しないとほとんどないため。自分の印象では、敗戦を境にそれ以前の歴史は否定されるべきものという感じもして、素直に自国の歴史を誇るべきものとして持っていていいものか、少しためらわれる気もする（女〇〇）

④「少しあると思う」

- *真実を隠して教科書に載せたりすることはよく聞きます。でも自分で勉強しないことがいちばんの原因だと思いますが（男〇×）
- *多少は関係あると思うが、本人の関心の持ち方次第（女〇〇）

⑤「ないとはいえない等」

- *歴史を学ぶというより受験用の暗記であった。学校では古代から近代までは詳しく授業をするが、現代史にはあまりふれていない。そのあたりが歴史を知らないといわれてしまう理由ではないか（女〇〇）
- *テスト・受験のための勉強で、好きな私でも、自国の歴史を知ろうという気持ちで勉強をしたことがない。最低限テストのために勉強したら、好きな時代以外は忘れてしまっているのが現状（女〇〇）

一方、⑥関係が「ない」

- *自分で知るべき。教科書問題とかで最近もめているが、先生側だって正しい歴史なんて分かっていないのではないですか。子供がかわいそう（男××）
- *単なる無関心のせい。人のせいにするのはおかしい（女〇〇）

⑦「ないと思う」

- *自分の興味の問題である（女〇〇）
- *歴史を好きな人はよく知っていると思うし、嫌いな人は詳しくないと思う。授業や教え方の問題ではないと思う（女〇〇）
- *よく知らない、といわれていることを知らなかったが、授業とは関係ないと思う。でも、教科書より参考書のほうが、補足がたくさんあったから面白かった（女〇〇）
- *日本史（歴史）嫌いの理由では「過去を知って何の役に立つ？」が多かった記憶がある。現在日本で映画「パールハーバー」が大人気で上映されているが、壮大な過去に、幾多の祖先がどう生きたのか（戦争という恥ずべきことも含め）、という自己以外の相対的な興味や魅力を感じない友人も多かった（男〇〇）

⑧「あまりない」

- *中学の歴史の先生は好きで、授業もそんなに面白くないとは感じませんでしたが、やはり私は歴史が嫌いなので、あまり関係ないと思います（女×非）

⑨「あるとは思わない」

- *無記入…（男〇×）

このように、「自分の国の歴史をよく知らない」のは、「授業が関係ある」と答えた人のほうが多かったが、関係のあるなしの意見は好き嫌いに関わらず、両方に見られた。すなわち、好きな人は授業に関係なく好きであろうし、嫌いな人も同じ理由で嫌いということがいえる。しかし、「過去を知って何の役に立つ？」という意見が多かったというのは何に由来するのか、やはり気になるところである。

◆若者たちの率直な意見や反省

自由意見では、若者たちの素直な気持ちが現われている。いくつかに分類してみると、

（A）教科書

- *教科書に問題があるのではないだろうか（男〇×）
- *先生によると思うが、教科書だけでは歴史上意味のあった問題の真意などが、単語上の問題で終わってしまうと思う（女〇非）
- *私が中学のころに比べたら、いまの教科書のほうがたくさん教わらなかったことが載せてあると思う。知りたくない人は知る必要もないし、知りたい人は自分で調べてどんどん知識を深めればいいと思う（女〇〇）

（B）授業・教え方

- * 教え方が悪い、授業がつまらない、面白い授業を (女××)
- * 知識を詰め込むだけで、興味を持てるような教育をしていないからではないか (女△×)。
- * 全体的に浅くやろうとするからだと思う (男○×)
- * 年代や人物名などを暗記するばかりで、断片しか記憶に残らない。もっと流れを分かるように教えないとダメだと思う (女○×)
- * 授業では、興味が湧くようなエピソードをあまり教えてくれない。面白くない。また、自分たちで考えさせるような授業をしていないように思う (女○○)
- * 普段から歴史好きでないかぎり、とくに勉強する機会がないので、学校での歴史の授業の役割は大きいと思う。また、教える教師の思想に左右されやすくなる (女○○)
- * 受験と密着した授業では仕方がない。幼稚園で、もっと楠木正成とか源義経の話を教えるべきだと思う (女××)
- * 日本人は英語が話せないといわれる英語の授業と同じで、教科書どおりに進めているためではないかと思う。覚えるだけの授業ではなく、考えさせる授業がよいのではないだろうか (男○○)
- * 歴代の天皇の名前や、過去の戦争の名前ばかり覚えさせられて、その時代はどんなものだったか、なぜそのような戦争・事件が起こったのかをきちんと説明してくれる先生が少ない。また、教科書に書かれていないことで、歴史上重要な問題もある。たとえば、315部隊(ママ)の事実や南京大虐殺も、きちんと伝えるべきだと思う。隠しているわけではないと思うが、知らない人が多すぎると思う (女×○)

ここに見られるように、年代・人物などを“単語”として暗記するだけの授業は、英語の授業と同一にマイナス評価されているところが面白い(2人が指摘)。

(C) 暗記物・受験用の科目

- * 授業でひととおり習うけれど、テストのために覚える感じで、一時経つと忘れてるのが大半だと思う (女△△)
- * 学校側は受験対策の授業しか出来ないため、生徒も暗記する作業に終始するのみので、歴史の意味を知るところまで至らない (男○○)
- * テスト前に暗記しておけば点がとれるので、テストが終わればすべて忘れてしまう。興味のない人は授業内容を覚えていないから、まったく意味がないと思う (男○○)
- * 受験で日本史を選んだので、高校でもすべて習ったが、世界史は中国史以外習わなかった。歴史を学ぶためではなく、授業は受験の道具だったと思う。この状態で覚えたものは、受験が終われば消えてしまうのは当然だし、日本史を選択しな

い生徒は、高校でほとんど歴史を習わない。これで自国の歴史を知っているかといわれてもムリというものだ（女〇〇）

何人もが指摘する、暗記物＝受験の道具＝身につかない、というところが空しい。それでも、センター試験などで、日本史を選ぶものが多いというのはなぜだろう。筆者は数年前、百人一首を習う中学生に、解釈ではなく、テストのために上の句と下の句をバラバラに教える先生がいることを知って驚いた経験から、「テスト前に必死で覚えても、内容はほとんど頭に入っていない」のを当然だと思う。

学校という、子どもの人生にとって“大事な機関”が、先人の事績である文学や歴史の知識も素養も身につかない、不思議な日本人を再生産していることに危惧を覚えるのは筆者だけではあるまい。

（D）教える「時代」・学びたい「時代」

*少なくとも、鎖国中はかなりつまらない（男××）

*大正以降のことを詳しくやらない。ペーパーテストの点のとり方を教えるだけ。暗記する題材としての日本史？（男〇非）

*古代とかより、戦争のこととか現在のことをもっと時間をかけて詳しくやったほうがいいと思う（女〇〇）

*とくに現代は戦争に負けたせいか、ろくな授業ではなかった。明治から欧風の文化を取り入れ、それを現代になって至上のものとしたことが、歴史を知らないといわれる原因の一つだと思う（男〇非）

*年表を覚える授業ではなく、変動の原因やその理由を教えるべき（歴史の流れみたいなもの）。また、現在の政治経済に関係あるのは現代史だと思うので、現代史を重視すべき！ ただし、その際は戦争をひき起こした国として、今後どういった方針を目指すのかを明確にした上で教えないと、混乱をきたすと思う。他国との交流を深めるならば、その国の歴史を知ることは不可欠（女〇〇）

*現代史から始めて、さかのぼったらどうなるか、ためしてほしい。マンガはどれぐらい役に立っているのだろうか？（男〇〇）

「過去を知ってどうする」と思う一方、「現代史を重視すべき」という声は決して少なくない。また、マンガは何にでも役立ち、学習マンガで歴史に親しんできた子供たちも大勢いるだろう。もっとも、学習マンガ「日本史」の脚本を書いている人によると、「戦後は書きにくいのも事実。せいぜい田中角栄の“日本列島改造論”ぐらいまで」という。

（E）興味の持ち方・好きかどうか

*（日本の歴史を）よく知る必要がなぜあるのですか？（女×〇）

- *近現代史から学ぶべきだと思う。とくに現代史。単純に新聞・ニュースの背景が分かりやすく興味が湧くし、自分、日本人についても深く考えようとするのではないか（男…非）
- *中学・高校時代、歴史に関してさほど関心はなく、ただ授業を聞き流していたように思う。今頃になって、日本の歴史が自分の頭に入っていないのを少し情なく思う（女××）
- *授業というより、生活に密着していないから知らないと思う（男×非）

興味を持たせるには、絵本やマンガで親しませるなど家庭での教育、そして学校では教科書だけでなく、教え方も工夫すればよいのではというのは簡単だが、生徒の学力レベルが低いのも無視できないようだ。

ある都立高のOB教諭（世界史）はいう。「ナポレオンやクレオパトラは辛うじて知っているが、ヒットラーやレーニンの名前を知らないのは9割以上だった。こういう学生にエピソードを交えて教えるのは並大抵ではない。また、今の教科書は歴史の物語としての面白さが生かされていないため、興味をもたせるのに骨が折れる」。

（F）日本人としての“意識”

- *日本人にはナショナリズムというか、国家意識があまりないように感じるので、とくに自国の歴史に興味を持たないのでは（男××）
- *歴史は教科書で学ぶものではない。人から人に語り継ぐもの。今の日本には語り部となるべき人たちとの共存する場が少なくなったと思う（男××）
- *よく知らない理由を授業で教えてくれなかったからとはいえないと思う。自分の国をよくしようという関心が薄い国民（自分を含め）だからだと思う（女××）
- *授業がどうこうより、ここ数十年の発展が大きすぎ、過去のことがあまりにかけ離れているので、あえてそれを知りたいとも思わないから（男×非）
- *自分の傷に塩をぬりたくないから、詳しく社会が歴史を教えてくれないからだと思います（男×非）

このようなアンケート調査がムダではなかったと思うのは、自国の歴史について、彼ら若者の目を覚まさせたり、反省の弁も聞かれたからだ。

“語り部”といえ、数年前、修学旅行で広島を訪ねた中学生が、平和記念館で原爆・戦争の悲惨さを語り継ぐ人に対し、モノを投げつけるという“事件”があった。その中学生が自国の過去（歴史）を共有しておれば、決してそんな行動には出なかったのではないか。もし、価値観の違いというならば、ホームレスの男性を虫けらのように蹴とばしたり、殴り殺す少年たちと同じであり、いずれにしても“教育の敗北”でしかない。

第2章 中学・高校に見る戦後教育の変遷

冒頭にあげたように、「(歴史を)よく知る必要がなぜあるのですか?」とか「歴史を覚える必要はない」という言葉が出るのは民主主義教育の成果?ともいえる。もっとも、歴史を教えない、本当のことを知らせないという方針の“愚民政策”だとすれば、それは見事に成功したことになる。なぜ、そうなったのか。戦後教育の変遷をたどってみよう。

児童生徒が学校でどのような教科を、どのように学ぶかの指針となるのが学習指導要領である。それは、全国どこにいても、子供たちが一定水準の教育を受けられるようにするため、学校が教育課程(カリキュラム)を編成する際の基準として定められている。また、カリキュラムはどの学年で何をどう教えていくかなどを定めた学校教育のプログラムをいい、学習指導要領に沿わないカリキュラムの編成は違法とされるなど、その時々学習指導要領の改訂による、学校・教師および児童生徒への影響は無視できないのだった。当然、教科書もこれに基づいて教科書会社等で作られ、国(文部省)の検定を受けたのち、各地の教育委員会により採択されることになる。

1945年(昭和20)の敗戦により、日本の学校教育はGHQ(連合国軍最高司令部)から「修身、国史および地理科教科書の回収」指令を受け、授業は“墨塗り教科書”で始まった。また中学まで義務教育(六三三制の採用)となり、世界平和を求める民主国家・文化国家を目指すことになった。

“墨塗り”は、それまでの「軍国主義的な記述」を一掃するためだが、どのような状況だったか。「五十年前、敗戦直後の教室で教科書を塗りつぶした経験があります。民主主義になったんだから、教科書も戦争中のままでは都合が悪い。占領米軍の手前もあるし。そんなことのようにでした。『次のページは全部墨を塗って。その次は×行まで。次は×行目から×行目まで』と先生。この表現がどうしてまずいのかの説明はなく、ひたすら塗ったことを覚えています」と、東京新聞のある論説委員は述懐する(95年4月16日社説「墨塗りの思想、いまも」、傍点引用者)。

最初の学習指導要領は戦後すぐの1947年に小中高校のそれぞれが出され、51年に改訂され、55年に社会科の改訂が行われ、小学校編と高等学校編、翌年には中学校編が出された。58年には小・中学校の、60年に高等学校の学習指導要領告示が出され(「道徳」の復活)、68年に各学習指導要領の改訂があり(教育内容の「現代化」)、さらに77年の改訂(「ゆとり」がキーワード)、そして89年(平成1)には幼稚園教育要領および小中高校それぞれの改訂が行われ(「国歌斉唱・国旗掲揚」の義務化)、98年には2002年から実施される新たな改訂も行われた(再び「ゆとり」がキーワー

ドに)。

たびたびの改訂は、政府自民党とそれを支える財界等の思惑によることが多く、戦後の“民主化”時代は長く続かず、着実に右傾化、復古調への道をたどっている。

◆時の政治に翻弄される「日本史」の軽い？扱い

では、中学・高校の「社会科」を中心に教科の変遷を見よう。

47年の学習指導要領により、中学の教科は必修教科と選択教科に分けられ、前者は国語・習字・社会・国史・数学・理科・音楽・図画工作・体育・職業（農業・商業・水産・工業・家庭）の10科目で、後者は外国語・習字・職業・自由研究の4科目であった。

社会科には必修の社会と国史があり、社会は3学年を通じて履修し、国史は2学年（週1回、35時間）と、3学年（週2回、70時間）で学ぶことになった。しかし、2年後の新制中学の教科と時間数の改正により、国史は日本史と変更され、学ぶ学年は変わらないが、履修時間に幅が持たされ、いずれの学年も35～105と変わっている。このときから1単位時間は50分とされた。

51年には日本史は社会に含まれ、社会科だけとなった。履修時間は1学年（140～210時間）、2学年（140～280時間）、3学年（175～315時間）と順に増えている。社会科は、教科内容（範囲）がわずか4年で大きく変わり、日本史の存在が曖昧になってしまったといえる。

一方、48年度から実施された新制高校（普通科）の教科を見ると、必修は国語・社会・体育のみ、選択は国語・書道・漢文に、社会（東洋史・西洋史・人文地理・時事問題）・数学（解析学1・幾何学・解析学2）・理科（物理・化学・生物・地学）、さらに音楽・図画・工作・外国語、そして実業（農業・工業・商業・水産・家庭）となっている。

社会科では東洋史／西洋史／人文地理／時事問題のどれか一つを選択し、必修とする。すなわち、1学年では必修の社会科を175時間履修し、2、3学年では選択した科目をやはり175時間履修する。すでに日本史（国史）が消え、新たに時事問題が加わった。

51年の改訂版によると、必修科目は国語（国語・漢文）・一般社会・体育であり、また選択科目は社会（一般社会を除く、国史〔日本史〕・世界史・人文地理・時事問題）、数学、理科のそれぞれの教科群から選択する各1教科となっている。つまり、社会科は一般社会を1学年（5単位）で必修とし、2、3学年で日本史／世界史／人文地理／時事問題から1科目5単位以上の選択となった。ここでは日本史が復活し（ただし、必修ではない）、東洋史が削除された。

この間、日本はGHQによる占領時代が続き、教育・教科書もその影響を受け、民

主的な方向をたどっていたものの、戦前の皇国史観の“亡霊”は死なず、50年秋に文部省は学校行事における日の丸掲揚・君が代斉唱を勧める天野貞祐文相の談話を各学校に通達し、11月3日には君が代が復活した。

そして、52年4月に発効する対日講和条約および日米安全保障条約が調印される、前年9月ごろを境に、再び独立国となる気運とともに、政治もそれに左右される教育も右傾化を露わにする。この51年には、戦後民主化政策からの逆転を意味する「逆コース」という言葉が流行った。

◆再び「日本史」が必修に

55年における改訂で、中学社会科は小学校との一貫性の確保が重要だとして、地理的分野／歴史的分野／政治・経済・社会的分野に分けられた。同じく高校社会科では、基本方針の「六、社会科・数学科・理科における知的教養のかたよりを少なくするため、それぞれの履修範囲を広くすること」になり、社会／日本史／世界史／人文地理という四科目構成で、日本史を含むすべてが必修となった。なお、この改訂で第2学年以降は単位選択制からコース制への転換が図られている。

ついで、道徳教育が必修となった58年の改訂で、中学校の教育課程は必修教科、選択教科、道徳、特別教育活動（ホームルーム）および学校行事等によって編成され、必修教科は国語、社会、数学、音楽、美術、保健体育及び技術・家庭の各教科とし、選択教科は外国語、農業、工業、商業、水産、家庭、数学、音楽及び美術の各教科となった。

このときから、社会科は地理的分野を1年、歴史的分野を2年、政治・経済的分野を3年で学習させることを原則とした。なお、道徳教育の必修は小学校でも同様で（第1学年は年間34時間、2学年以降は35時間）、そのため社会科の時間が減らされている。

60年に出された高等学校学習指導要領告示は、小中学校の改訂に連動したもので、教科は国語・社会・数学・理科・保健体育・芸術・外国語・家庭・農業・工業・商業・水産・音楽・美術・その他の教科・特別教育活動に分かれ、社会科は次のように細分化されている。倫理・社会（2）／政治・経済（2）／日本史（3）／世界史A（3）／世界史B（4）／地理A（3）／地理B（4）。ここでも、日本史は必修となっている。新設の倫理・社会は道徳に該当する。

◆中学でも道徳教育が前面に

68年に小学校学習指導要領の改訂があり、翌年に中学校の、さらに翌70年に高等学校の改訂が行われた。中学校の改訂では教育課程は教科（必修教科・選択教科）・道徳・特別活動の3領域構成に変わった。必修教科は国語、社会、数学、音楽、美術、保健体育、技術家庭の8教科とし、選択教科は外国語（英語・ドイツ語・フランス語

その他の外国語)、農業、工業、商業、水産、家庭の6教科となった。

社会科では小学校と同様に、道徳教育を前面に出し、併せて公民的資質の形成を重視したものとなった。すなわち、社会科・道徳・特別活動の教科である。中学校学習指導要領によると、社会科の目標の一では「広い視野に立って、わが国土に対する認識とわが国の歴史に対する理解を深め、その基礎の上に、わが国の公民としての基礎的教養をつちかうとともに個人の尊厳と人権の尊重が民主的な社会生活の基本であることを自覚させて、国家・社会の進展に進んで寄与しようとする態度を養う」との方針のもと、「普遍的な民主主義思想に留まらず国土・歴史への認識と理解による日本国民としての愛国的な公民形成が目標となった」という。

「公民」は戦前からあるが、これも揺れている教科である。かつて、GHQから「修身、国史および地理科教科書の回収指令を受けた」日本だが、皇国史観への郷愁からか、戦前に戻った感がある。そして、特別活動では「国民の祝日などにおいて儀式などを行う場合には、生徒に対してこれらの祝日などの意義を理解させるとともに、国旗を掲揚し、『君が代』を斉唱させることが望ましい」と指示するのだった。

これに続く高校改訂は、能力主義教育課程を進めるために、理科教育・産業教育に重点がおかれ、教科は国語・社会・数学・理科・保健体育・美術・外国語、家庭・農業・工業・商業・水産・看護・理数・音楽・美術・その他特に必要な教科の17科となり、看護・理数が新たに加えられた。

社会科は倫理・社会(2)／政治・経済(2)／日本史(3)／世界史(3)／地理A(3)／地理B(3)となった。このうち、すべての生徒に履修させる科目は、倫理・社会および政治・経済の2科目で、日本史、世界史および地理A(系統地理)もしくは地理B(世界地誌)のうち2科目となっている。具体的には、世界史と地理は第1学年から第2学年で履修させ、倫理社会、政治経済、日本史は第2学年か第3学年で履修することが望ましいとなっているものの、日本史は必ずしも履修しなくてもよいことになった。

“コンニチハ、コンニチハ、世界の国から……”と、国民の多くが大阪万博に浮かれるころ、日本史はかなり厄介者となっていた観がある。

ついで、中学校は77年の、高校は78年の改訂を見よう。これは小学校はじめ、「ゆとり志向の改訂で、学校教育の人間化」を進めたもので、中学の必修教科は国語、社会、数学、音楽、美術、保健体育、技術・家庭の8教科で従来と大差なく、他に道徳・特別活動・選択教科となっている。そして、小学校同様、特別活動の儀式において「国旗を掲揚し、国歌を斉唱させることが望ましい」と指示した。

高校の場合、その特徴の第一は国民共通の小学校以来の教育期間を10年間としたことにより、第1学年の教育内容水準を相応に下げ、中学校教育との関連性を強化し

たことである。教科は国語・社会・数学・理科・保健体育・芸術・外国語・家庭と単純化されたが、社会は現代社会（4）／日本史（4）／世界史（4）／地理（4）／倫理（2）／政治・経済（2）と分けられ、新たに現代社会が登場し必修（したがって、日本史等は選択）となり、倫理、政治・経済の序列が下がっている。

上記の“10年間教育”により、国語Ⅰ・現代社会・数学Ⅰ・理科Ⅰ・英語Ⅰなどは、「高等学校教育として共通的に必要とされる基礎的・基本的な内容」であり、中学年以降の基礎として位置づけられ、「すべての生徒に履修させ」ることになったが、この改訂に日教組は国家主義的であると批判したという。

しかし、のちに触れるように“闘う”日教組は、文部省と結託するなどウラオモテのある組織だった。

◆この間、教科書はどのように論じられていたか

学習指導要領89年版では、幼稚園から高校までの改訂が同時に行われたが、その前、83年に中教審の「教科書の在り方に関する委員会」の答申が出された。

そのころ、どのような意見が見られたか。この答申の問題点にふれて、谷川彰英（千葉大学助教授、教育学）は教科書の記述内容や採択の方法と、82年の教科書問題（高校教科書などで、日本の大陸「侵略」を「進出」と書き換えたとの新聞報道で問題化・注①）に関連して、次のようにいう。

「教科書の問題がほとんど現場の教師の手を離れてしまっており、「今回の問題に対しても、現場の教師たちの関心は驚くべきほどに低かった。真に解決していくためには、現場の教師たちの手によってより良い教科書像を鮮明にしていく他ない」と断言する。ついで、教科書の採択は東京都と京都府を除き、かなりの高率で“県定”化が進んでいる現況を説明し、中教審の答申内容は「今日の教科書をさらに画一化し、自由な選択の可能性をせばめ」る結果、「現場の教師たちの手からますます離れていく」という。

そして問題は、「国民の意識や思想を統制するために教科書を利用しようとする時、顕著に表れてくるのが、教科書画一化の路線であり」、「それと同時に教科書重要視論ともいえるべきものがあるのではないか」と憂える。

つまり「教科書というのは、国民形成の上で大変大切なものだから、公平を期して慎重に作らなければならないといった論法」だという。さらに、現行の教科書の多くは「伝達機能型で、“世界”が閉鎖されており、それは“教化”につながる」とし、“道しるべ”的な教科書（指導機能型）こそ「個々人の思想の自由を広げる、開かれた“世界”を有するのであり、根源的な意味で“教育”につながる」と論ずる。

しかし、採択の現場は「教科書の内容ではなく、営業の力で動いて」おり、“道しるべ”的な教科書はほとんど採択されないと、例を示す。すなわち、中教審の答申に沿った教科書ばかりとなるわけで、「政治家も財界人も、教育に疎い学者たちも、そして忘れてはいけないが文部省の役人諸氏も、しばらく教科書について素人の意見を

述べるのはやめてほしい。教科書の主人公はあくまでも現場の教師たちであり、それを使って育つべきなのは子供たち自身なのだから」と結ぶのだった（『『教科書』問題と教育実践』『世界』83年9月号所収、傍点ママ）。

翌年には、歴史教科書の問題を論じた{鼎談書評}「公教育から『歴史』を廃止せよ！」がある。別枝篤彦著『戦争の教え方—世界の教科書に見る—』（新潮社）について語り合ったもので、各国の教科書は戦争の回数・戦死者の数などをあげた具体的内容で、子どもたち自身に考えさせる記述となっていることなどを紹介し、翻って日本の教科書はどうか、授業は……というものである（『文藝春秋』84年10月号所収）。

作家の丸谷才一はいう。「別枝さんの本を私なりに要約して、どうすれば面白くない（日本の）教科書ができるか、五カ条あげますと、第一に具体性の欠如、第二に明確な主張の欠如、第三に趣向、工夫の全くない書き方、第四に生氣のない文体、第五に大問題の回避、ということです（笑）」。

劇作家・大阪大学教授の山崎正和も、「日本の教科書が無味乾燥だということと採択率が高いということとは車の両輪のようなものなんですね。採択の高い教科書を作ろうと考えますと、結局は、大問題を避け、明快な主張をせず、生氣のない文章で、具体的な事実を避けて書かざるをえない」と同調する。

また、東京大学教授の木村尚三郎によると、「私は歴史を学校で試験することには、本当をいうと反対なんです。入試科目から除いたほうがいい。しかし、にもかかわらず教室で教えなければいけないと思っています。本来、正しい歴史の教科書などありえません。歴史叙述はすべて副読本としての扱いしか出来ないものなんですね」となるようだ。

ところで、タイトルのような“爆弾発言”は山崎から出た。「現在の日本のように非常に文明度の高い国において、世界の最先端を進むつもりならば、中等公教育—私学も含め、文部省の何らかの監督下にある中等教育—において歴史の教育を廃止すべきだと思います。いや歴史のみならず、社会科のかなりの部分、国語における文学教育、その他芸術教育等々を、学校教育から社会教育へ放出すべきであると考えます。そうすれば、戦争についても突っ込んだ、したがって極めて偏った議論もできます。（中略）事実、現在の日本の言論、出版物を見れば分かるとおり、あらゆる議論が行われ、相互批判がされているわけで、子供たちも常時それに触れている。その生活の中で、どうして一定の時間、教室というところへ押し込め、無味乾燥な教育をする必要があるのだろうか」。

それでも、文部省主導の教育はいじくり回されこそすれ、本質は少しも変わらないのであった。89年版学習指導要領による教育課程の改善のねらいは、（1）心豊かな人間の育成、（2）自己教育力の育成、（3）基礎・基本の重視と個性教育の推進、（4）

文化と伝統の尊重と国政理解の推進、とある。

そして、中学の教育課程は必修教科、選択教科、道徳及び特別活動によって編成され、必修教科は国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術・家庭の8教科（「国語等」）で以前と変わらないが、3年生の選択教科は「国語等及び外国語の各教科並びにその他」と全10教科に拡大され、また時間配分も幅を持たせたものとなっている。

高校では、必修教科は国語・地理歴史・公民・数学・理科・保健体育・芸術及び家庭となり、新たな「家庭科」は男子も必修となった。社会科は前述したとおり、地歴科と公民科に取って代わられたのである。

◆“近隣諸国条項”の功罪

91年、東南アジアを歴訪した海部俊樹首相は、シンガポールでの演説で、第二次世界大戦でのわが国の行為を厳しく反省、学校教育のなかできちんと教えていきたいと述べたと報じられた。しかし、それを受けた国内の動きを見ると、「実るか首相の“国際公約”／文部省の熱意いまひとつ／受験と関係薄く、学校側持て余す」（東京新聞91年5月17日）となる。学校現場では、「文部省の指導とは裏腹に、中高校での現代史学習は定着しているとはいいがたく」、また、高校の先生たちは「1年間の授業だけで現代史まではとても教えきれない」といい、「時代順に教えていくという授業にもよるが、現代史に大学受験でまだ比重がかかっていないことも影響する」と記事は解説する。さらに、世界史教科書の編集者は「現代史にスペースをさくとかえって学校の拒否反応が起きる。入試にあまり関係ないですよ、というわけです」と打ち明けるのだった。

日本史も同じようである。近現代史は、中学高校とも敬して遠ざけられていたのであろう、それを証明する？中学高校での社会科の状況を垣間見せる調査結果がある。

「高校生実態調査／『憲法読んだことない』13.2％／平和問題には敏感 自衛隊“違憲”3分の1」によると、憲法を「何回も読んだ」「一通り読んだ」は合わせて16.1％だが、「読んだことがない」は13.2％（5年前調査12.1％）となっている。「憲法は中学3年の社会・公民分野、高校の政経で学習することになっているが、この結果から素通り授業になっていることがうかがえる」（東京新聞92年5月3日）。これは、日本高等学校教職員組合が前年12月に25都道府県の約1万9千9百人の公立高校生を対象に行った憲法意識調査の結果である。

94年に、社会科教科書の内容について大きな動きがあった。「日本の戦争責任をどのように若者に伝えるか、教科書がこの重い課題に取り組み始めた。30日に公表された文部省の検定結果によると、来春から高校で使われる社会の教科書45点のうち、政治・経済を中心に約3分の1にあたる14点が『戦後補償』の問題を取り上げた」。

執筆者のひとり大江志乃夫（茨城大学名誉教授）は、その問題を教科書に書く理由について、「なぜ歴史を学ぶのか。私たちに重くのしかかっている日本の戦争責任、戦後責任について理解する必要があるから」だといい、「戦争中、アジアで日本がしたことを知らないのは日本の子供だけです。このままでは、コミュニケーションすらできなくなる。過去を学ばなければ、アジアの国々と新しい未来を築くこともできない」と語る（東京新聞94年7月1日「教科書検定／やっと学べる？戦争責任／社会の1／3に『戦後補償』」）。

ところで、文部大臣になった途端に、問題発言をする政治家は後を絶たない。

戦後50年を迎えた95年8月、島村宜伸文相は記者会見で、「…現に戦後っ子だけで3分の2ですね。戦争を全く知らないような時代になってきているのに、相も変わらず昔を蒸し返して、それをいちいち謝罪していくというやり方は、果たしていかなものかと思いますね」といったため、「島村文相の戦争観発言／韓国政府が憂慮／韓国紙も批判」（朝日新聞95年8月10日）となるのだった。

先の大江の発言「（戦争の事実を）知らないから教えなければ」に対し、「知らないから、教えなくてもよい」とも取れる島村の発想には、天と地との差があるではないか。

ちなみに、そのあと村山富市首相（日本社会党）が終戦記念日に、「戦後50年に当たっての首相談話」を発表し、「…わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。私は、未来に過ち無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止め、ここに改めて痛切な反省の意を表し、心からのお詫びの気持ちを表明いたします。また、この歴史がもたらした内外すべての犠牲者に深い哀悼の念を捧げます」などと述べた（東京新聞95年8月15日「戦争責任を明確化／首相談話 戦後処理には課題」）。これは日本政府が国連に申し入れ、2日後には英訳され国連文書として加盟各国代表団に配布されている。

◆現職調査官のホンネ

こと教科書問題となると、関係者の心は乱れ、検定も紆余曲折する。現職調査官のこんな発言がある。2002年度から導入される指導要領の改訂が行われた98年、ある座談会で日本史担当の福地惇（文部省主任教科書調査官）は、「検定のときに近隣諸国条項というのがあって、日本は侵略戦争をして悪かったと書いていないとまずい。（執筆者が）戦前から戦後の日本をあまりおとしめて書きたくないと思ってもそれができない」と検定基準そのものに疑義を呈した（東京新聞98年11月23日「小6近代史“戦争の贖罪パンフレット”／『がんじがらめの体制』／教科書検定基準／現職調

査官／アジア配慮を批判」、掲載誌は会員制の月刊『MOKU』黙出版・8～10月号)。

さらに同調査官は、「私は現在、検定基準に従って検定をしているが、(来年暮ごろから始まる)新しい学習指導要領の下での検定作業では、(教科書会社に)バランスの取れた記述を求めたいと思う」とコメント。これを受けて文部省教科書課の課長は「(発言はよく承知していないが)調査官の立場での発言には慎重であるべきだと思う。教科書検定は、近隣諸国条項を含む検定基準に従って、適切に行われてきたと考えており、今後も適切に行われるよう努めたい」と玉虫色の発言をしている。しかし、最近話題の、ある出版社の中学生向け「社会」等の記述には、この“意向”が反映されているようにも見える。

ちなみに、2002年度より小学校・中学校で実施(高校は1年遅れ)される新指導要領のねらいは(1)豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成する、(2)自ら学び、自ら考える力を育成する、(3)ゆとりある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実させる、(4)各学校が創意工夫をし、特色ある教育、特色ある学校づくりを進める、とある。

これまでの“詰め込み教育”から、再び“ゆとり教育”への転換とされ、その特長は①学校週5日制、②授業時間数・内容の削減、③「総合的な学習の時間」の導入である。だが、休みが増え、授業時間数が減り、あらたに総合的な学習の時間が導入されると、学習内容をすべて学ぶには時間が足りないのは必然である。

たとえば、小学校で習う円周率(3.14…)を“約3”と正しくない数字を覚えさせるうえに、多くの科目で約30%の削減が行われるという。間違ったことを教えると、将来その子供たちはどうなるか。人は最初に覚えたことを、後で修正する可能性がほとんどないという現実を無視した、子どもをバカにする教育としかいいようがない。

さらに、今でも学校行事等に時間が割かれ、教科書を最後まで履修する科目はほとんどないのが実情だということではないか。

高校の場合、卒業に必要な修得総単位数は48年度からの85単位以上だったのが、70年に現行の80単位以上と減り、さらに2002年度から74単位以上と“縮減”され、日本史に限らず、他の教科もますます内容の薄いものとなっていく……。

余談だが、学校週5日制にたどり着く前に、現行の隔週5日制(95年4月実施)があり、さらにその前、92年9月から第2土曜休日が導入されていた。これは「子どもたちにゆとりの時間を」ということで進められているかに見えるが、実は「昭和50年代に文部省と日教組とで議論となっていたのは、“先生の週休2日制”でした。それがいつの間にか“学校5日制”ということになり、最近では“子どもにゆとりを与えるための学校5日制”のデュエット」となり、本音がほかされてしまったと、前出の東京社説「墨塗りの思想、いまも」は“真相”を明かす。これまで東京都などで行

われていた一日研修（という先生の“休日”）や半日研修が廃止されるのは当然であろう。

子どもを利用する大人たちの、何とあざといことか。あらゆる分野で彼らはずる賢く、子どもたちの将来の芽を摘んできたのである。大人たちがこの国の“次代を担う”子どもたちに、何を与え、何を期待しているのかが仄見えてくる。冒頭の「よく知る必要がなぜあるのですか？」という問いに対する答えが出たようなものではないか。

第3章 当事者である若者たちは調査結果をどう読んだか

もう一度、若者たちの声を聞こう。調査結果についてクラス別に、感想を求める文章と記事風のものを書くことを課したところ、驚き・先生への同情・反省・指摘・提言など、さまざまな意見や“論調”が集まった。○は“感想・意見”組、◎は“論調”組をさす。

（A）教科書

- 日本史を嫌う人も、そのほとんどは日本のことや少なくとも生まれ故郷は好きなのはである。授業のやり方や教科書次第で、歴史に対する考え方を変えるのは十分に可能であると思う（男21歳）
- ◎韓国との教科書問題が騒がれている最近、若者の歴史離れが増えている。これは少し寂しいことではないか。もしも教科書を作り直すなら、今度はもっと魅力のある教科書を作っていただきたい（男21歳）
- 一冊の教科書だけを元に教えるのは、歴史というもののあり方とはまったく矛盾している。歴史とは記録に残っていないひとり一人の人間の存在によって成り立っている。三冊ぐらいの教科書を比較してみるなど、視点を多く持たせる教育が必要である（女22歳）

（B）授業・教え方

- ◎暗記中心の授業内容で、現代の自分につながる近・現代の歴史を軽視しては、生徒は関心がもてない（男20歳）
- 覚えることもたいへんだけれど、覚えればいいだけの教科を教える先生もたいへんだと思った（女21歳）
- ◎歴史教科書問題が騒がれている。韓国や中国からみて間違った表記があるからだ。しかし、われわれ日本人は、何が間違っているのかピンとこない。それは授業に問題がある（女22歳）
- 多くの教師は学習指導要領の許す範囲内で、必死に授業を行っていると思う。ただ、まことにそれが問題で、教育委員会はもっと教師に自由な裁量を与えるべき

だ。歴史を学ぶ際に必要なのは、一方の視点からだけ見るのではなく、さまざまな視点から検証することなのだから（男22歳）

○偏差値が人間性まで決定する現状（社会）では、教師が歴史を通して人間の本質に迫る時間など皆無に近いことも理解できる。彼らもまた、進学率で自分たちの力量を測られている一人に過ぎない（男23歳）

◎とくに中学校の先生は、話し方の勉強をするべきである。落語、漫才何でもよいから話がうまくなる努力をしてほしい。人物を中心とした教え方をするべきである。歴史は人が動かしてきたものであるから、その魅力を伝えることが大切である（男25歳）

（C）暗記物・受験用の科目

○受験に役立つ授業はみんな真剣に受ける一方、そうでない授業は関係ないという顔をしている。教える教師も分かっているはずだ。受験に役立つ授業や教科書にそった授業だけがすべてではないことを（男25歳）

○受験のシステムのせいで歴史の学び方がゆがんでいる部分もあるのだろうが、逆に考えれば受験のおかげで日本史が成り立っているのではとも感じる。歴史は自分を高めるために学ぶもの。その思いがなければ学ぶ意味はない（男25歳）

（D）教える「時代」・学びたい「時代」

○現代史を習わないことが、常識のようになっていくのは避けてほしい。近・現代を習うことこそ、これから社会に出て行く若者にとって大切なことだと思うから（女19歳）

○今を生きている私たちにとってもっとも関係のある現代が時間不足で触れられていないことのなんと多いことか。痛みを、苦しみをどうぞ忘れてくれるなど叫ぶ先人たちの声が聞こえる。クロマニヨン人より大きな声で。先人たちの声を聞き、時代を知る。そして自分たちのルーツを知る。これが歴史の授業ではないか（女23歳）

◎近年、現代史の内容が問題視され、日本史に対する不信感がみられるようになったが、学ぶ側としてはまだまだ学びたい分野であるようだ。しかし、近年、問題となっている戦時中の内容まで、授業が進まないケースも見られるのは皮肉なことである。歴史は思い出ではない。見たくないところをみてこそ、役に立つのである（男24歳）

◎「日本史」とは別に「現代史」という教科を作るべきだと思う。日本史であまり触れられない現代、とくに太平洋戦争以降を暗記するのではなく、考えさせる授業を「現代史」でやれば、日本人は自国の歴史を知らないなどとはいわれなくなるであろう（男24歳）

(E) 興味の持ち方・好きかどうか

○現代の子供たち、若者世代には私みたいな“歴史嫌い”がたくさんいるはず。それは歴史の楽しさを知るよりも先に、もっと簡単に、分かりやすい楽しいことが身近に溢れているからだ。教える立場の人はもっと気合を入れて、がんばってもらいたい (女20歳)

◎NHK大河ドラマなどは、見ているだけで面白く感じるのは、やはりドラマ形式だからであろう。生徒がまず興味を持たなくては、面白いと思うはずもない (女22歳)

(F) 日本人としての“意識”

○日本人が歴史を知らない、というのはバカにされているのである。自分だけの世界にこもっている分には問題ないが、歴史をあまりにも軽んじるのは危険ではないかと思った (女21歳)

○昔のことなんか興味がないという意見には、かなり驚いた。日本人として、日本のことに興味がないといっているのと同じに思えたからだ。今というのは、昔があるから存在するのであって、とつぜん今が出てきたわけではない。いきなり大人で生まれてくる人間はいないだろう (男22歳)

○歴史嫌いの多いのに驚いたが、歴史というものは、私たちの生きている今を創った祖先の記録なのだから、興味がないなんておかしいのではないだろうか。歴史を知らなければ、これからのことなど考えられるわけがないのに (女23歳)

◎教科書問題で年寄りたちがあれこれいっているが、授業を受けるのは生徒だということを忘れてはいけない。「日本史の授業は“ウソ”を教えている場合がある」という意見に、教える側はどう反論できるのだろうか (女23歳)

◎戦後教育は、受験勉強に代表される“詰め込み”を私たちに植えつけた。今度は新しい教科書に対するマスコミの意見を鵜呑みにしないよう注意が必要である (男24歳)

○自分の国の歴史を知らないでも生きていけるが、知っているべきだとは思う。しかし、今の私はほとんど知らないのである。根本的なところから「なぜ自国の歴史を知る必要があるのか」を歴史の勉強のスタートとすれば、少しでも解決に向かうのではないかと思う (女24歳)

○戦争体験者の祖父母は、その悲惨さを日々繰り返し家族に語るが、彼らの考えは微妙に右よりなのである。日本がアジア諸国等に及ぼした悲劇については決して語らないし、悪いとは思っていない。「歴史は語り継ぐもの」という意見があるが、よほど多くの人の話を聞かねば、公平な意見は持ちにくいのではないか。だから学校の教育のもつ責任は大きい (女25歳)

◎なぜ義務教育課程の必須科目に歴史があり、何を教えなければならないのか。改めて考えてみる必要があるのではないだろうか (女28歳)

○いまテレビなどで取り上げられている教科書問題がピンとこないのは、日本がアジアで行った戦争の内容をよく知らないからである。歴史とは“戦争の歴史”である。それをいちばん近くにある戦争のことを教えないのは問題だと思う（男33歳）

最後に、中学高校とも日本史が“嫌い”だった女性（24歳）が、予備校で“好き”になった理由と反省の弁を紹介しよう。

「私の印象に残っている日本史の授業は、浪人時代にYゼミでお世話になったT先生の授業だ。彼のおかげで受験を終えたいまも中国王朝史、歴代天皇名を唱えられる。彼の話は実におもしろい。心に残っているのでは、カミカゼ特攻隊の話がよかった。授業中だというのに、涙が止まらない生徒が何人もいた。衝撃的だった。彼の与えてくれたものは想像以上に大きかった。たった一つでも忘れてはいけないことを学んだ気がする。日本史の授業を学んだ上で、そんなものが一つでも見つけられればいいと思う」。

◆国や人を愛する気持ちは、どこから生まれる？

今回の調査に対する、若者自身の意見や論調には、自国の歴史（とくに現代）を知るのは大切なことだと、かなりの人が再認識したようだが、それでも「なぜ知る必要があるのか」に近い心情を抱くものも少なからずいる。その理由はさまざまであろうが、学校教育の変遷をみると、いまの若者が日本の歴史を満足に学ばなかったばかりか、その親やさらにその親の代もきちんとした歴史教育を受けて、子らにそれを伝える努力をしてきたのかという疑問も浮かんでくる。

度重なる学習指導要領の改訂と、それに伴う教科の改廃・細分化、さらに“教育の機会均等”“受験至上主義”などに振り回されながら、教育現場はその都度混乱に陥ったことであろう。それが学ぶ側の生徒にまで及び、なかでも社会科はその時どきの為政者やそれと結びつく集団の要求に屈し、もっとも影響を受けてきた科目であり、さらに自国の歴史である「日本史」は出したり引っ込めたりと、蔑ろにされてきたことも裏づけられた。そのため、「知らなくてもよい」と思うまでになった、彼ら若者こそ国家の犠牲になったのである。

それを裏づける論評はかなり前に出ている。稲垣忠彦（東京大学教授、教育方法史）は、自著で受験競争の弊害についてふれ、「学習指導要領の枠」「正答主義の枠」「試験の対象となる科目、内容による能力の枠づけ」と三つの枠があるという。なかでも、学習指導要領は「1958年から法的な基準性をもったものとされ、教科書もそれを前提として編集され検定をうける。試験も学習指導要領とそれにもとづく教科書を前提とする。公立学校の試験の場合、とくに公平をもとめるとの理由からその規制は強い。

学習指導要領は、ほぼ10年おきに改訂されてきた。それは、国家による文化の選択という性格をもっている」。

さらに、教科書は「その編集・作製において、文部省からつよい規制を受け、スペースの制約もあり工夫の余地は少ない。学習指導要領にもとづき、多くの内容をもりこみながら、その記述は平板であり、要約的であり、子どもの興味、関心とは遠いものである」と断ずる（『戦後教育を考える』岩波新書・1984）。

このような教育を強いてきた文部省（現・文部科学省）は最近になって、生徒の学力低下の批判に応えるため、“規制緩和策”を打ち出したという。東京新聞「高校教科書／指導要領の逸脱容認／文科省 選択科目で／発展学習の需要増え」によると、「2003年度から使われる高校教科書のうち選択科目について、学習指導要領の枠を超えた高度な内容を認めることを容認した」。ただし、「本文以外のコラムや参考資料に限定」され、「地理歴史、公民は必修科目のため対象外」（2001年9月18日）というから、あまり多くを期待できない。

つまり、「学習指導要領に外れた記述に対して厳しい検定を加えてきた文部科学省が、高校の選択科目という条件付きながら、逸脱した記述を許容したのは、大きな方向転換だといえる」が、「遅きに失したといえる」からである（同「解説」）。

◆“先送り民族”日本人の未来は

道徳的でない大人たちは、こぞって“道徳教育”に熱心である。学校行事で、日の丸掲揚・君が代斉唱の義務を法制化したのは99年8月であった。しかし、戦前も戦後も日の丸・君が代の効用は、善なる日本人に何ももたらさなかったことは歴史が証明している。それは、いつの世も“次代を担う”子どもたちといわれて大人になった日本人が、また子どもたちに向けて同じセリフ（お題目）を繰り返し、何ら反省も模範も解決策も示さず、先送りしてきた民族性にある。

すでに（“国旗国歌とも）国民の間に定着している”のであれば、あえて法制化する必要はなかったはずだ。それを強行したのは、形式（決まり・規制）だけを整えることが好きな日本人の悪弊であり、その根底にあるのは、日本人（大人）としての、自覚、誇り、そして自信のなさであろう。

若者たちが“歴史”として、いまを学んでいるのは大人たちの姿からである。官僚の不正や無責任、政治家の汚職や選挙違反、警察の度重なる不祥事、身近でいえば教師による買春、セクハラなど数え上げればきりが無い。これらを見聞きし、いま不況の波も被っている多くの若者が、無国籍者のような“根無し草”の印象を受けるのは、自分自身いや、この国の将来に希望が持てないからではないか。

また、教育勅語の復活を唱え、真顔で「神の国」発言をする森喜朗首相は支持しな

かったものの、8月15日に拘る靖国神社公式参拝の理由を、「ひとえに選挙に勝つため、日本遺族会の票をあてにしているのです（注②）。15日の参拝は彼らとの“約束”です」と本音を言えない小泉純一郎首相に人気が集まるという現象は、有権者が過去から何一つ学んでいない証拠であり、日本人のもつ歴史認識はお粗末極まりないといえる。

それぐらい、戦後の日本史教育は“成功”したわけで、別の表現をすれば、お上に逆らわない“大人しい日本人”が連綿と続いていることを意味する。

この流れを断ち切らなければ、日本の将来はさらに暗澹たるものになるだろう。いまこそ、若者たちに次代を担わせ責任と自覚を持たせることである。そして、この国の将来や自分たちの未来を考えさせるためにも、真の意味での歴史の学習、すなわち、現代史から教えるべきである。

自分の生きている“現在”や父祖の時代を知ることは、自分自身や祖国、必然的に他の国や国民についても、否応なく関心をもたざるを得ず、また現代の戦争の悲惨さを知るとき、再び起してはならないという気持ちを抱くことにもなるだろう。

そして、テロ行為を許せないと思うと同時に、その報復攻撃も同罪だという声の大合唱となる時代が、この国に一日も早く来ることを願う。

歴史は“つくる”のではなく、さまざまに“ある”ことを忘れてはならない。

注① 高橋史朗著『教科書検定』（中公新書・1988）によると、これは文部省記者会に属する日本テレビ記者による“誤報”から始まった騒動、つまり検定の前から「進出」と記述した教科書があったのを、“書き換え”と誤って報告したものだという。この誤報がなければ、その後の近隣諸国との関係はちがったものになっていた可能性がある。

注② 田中伸尚・田中宏・波田永実著『遺族と戦後』（岩波新書・1995）の「Ⅳ 遺族と政治」の章にある、橋本龍太郎元首相や小泉現首相など自民党の厚生大臣経験者、とくに社労族の“活躍”ぶりなどから、そのニュアンスが読みとれる。

なお、堀江湛・岡沢憲英編『現代政治学』（法学書院・1982）などによると、この関係の圧力団体として日本遺族会のほか軍恩連盟全国連合会などがある。2001年夏の参院選では自民党の比例代表候補である日本遺族会副会長と軍恩連盟特別顧問の小野清子（元・体操選手）が上位当選を果たしている。ここには、どんな時代になっても“戦後”がずっと続いていく世界が存在する。

（付記 執筆するにあたって、旧・文部省編「学習指導要領」等のほか、水原克敏著『現代日本の教育課程改革』（風間書房・1992）を参考にさせていただいた）

追記 本件に関連して、筆者個人のHP上で紹介がてら同趣旨のアンケートを行っており、これまで7名の方から回答を得ております。ありがとうございました。

内訳は男性4名、女性3名。年齢は24歳2名、28歳、30歳、57歳、58歳、59歳。居住地は千葉県、東京都2名、新潟県、静岡県、愛知県、兵庫県となっております。

参考までに、フリーアンサーを紹介しましょう（5名）。

- 日本に都合のいい事実ばかり教科書に載っていると思います。
- まず、歴史に関して興味があるかないかだと思います。興味のある人は、他の環境に影響（学校の授業とか）を受けても自分から率先して調べたりするものですから、学校の授業は関係ないと思われます。まったく興味の無い人間は、（私もそうでしたが）学校の授業で習うものしか歴史に関して情報が入ってきません。それをどう受け止めるかどうかは多少、授業の内容や先生の教え方に関係があるかもしれません。先生の教え方がうまく、歴史に興味を持ち始めたとか。そういうこともあるかもしれません。
- いままで自分の国の歴史についてあまり考えたことはありませんでした。でも歴史を知らないことと授業とは関係がないと思います。いまや情報があふれていますから、知りたいと思えば様々な手段があります。もしも本当に知らないのなら、それは授業が問題ではなく、知ろうと思わない、知りたいと思えないことが問題ではないでしょうか。かくいう私も日本の歴史をよく知っているわけではありませんが、日本固有の伝統や文化は大事に伝えていきたいと思っています。
- 学校授業と関係あるが大勢に大きく影響していない。歴史を生活（自分の考え方を決めたり、自分や社会の人たち、外国の人の考え方を評価する）に使う習慣を日本人は持たないためだ。使わないものは要らないものなので、軽んじられ忘れられる。だが世界中の人がそうではないのだ。
- 史観をどのように選択しそれをどのように展開し教育するかという自由がどこで確保されるのかを議論することから始めなくては歴史教育の真価は発揮されないだろう。

* * *

なお、私のHP「心—こころ—橋本健午のページ」のURLは次の通りです。

<http://www19.u-page.so-net.ne.jp/wj8/kenha/>

また、Eメールアドレスは kenha@wj8.so-net.ne.jp です。

本件に関するご意見・ご感想を、当日本エディタースクールあるいは上記あてにお寄せいただければ幸いに存じます。